

國學院大學學術情報リポジトリ

連体助詞ナの形骸化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 蜂矢, 真弓, Hachiya, Mayumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000128

連体助詞ナの形骸化

蜂矢真弓

一

連体助詞ナについて、辞典の解説を見ると次の通りである。

「の」の母音交替で、(略)奈良時代にすでにわずかしか用いられないもので、後世は、いくつかの名詞に固定的に使われただけであった。(『岩波古語辞典』『基本助詞解説』の「な」の項)

手・目の交替形タ・マ、瓊・神カミの交替形ヌ・カムなど単独

では使用されない語形につくことがしばしばあり、上代において既に固定して語構成要素化していたと思われる。

(『時代別国語大辞典上代編』の「な」の項)

これらによると、連体助詞「ナ」は、名詞の被覆形に付くことが多く、上代語において語構成要素として存在していたということである。

本論文では、このような連体助詞ナの特性について、改めて考察する。そのために、今回は、連体助詞ナを伴う複合名詞をいくつか取り挙げることにし、まず、「名詞+連体助詞ナ+連

体助詞ツ＋名詞」の複合名詞の例について見て行くことにする。

『古事記』の「足^上名椎」・「手^上名椎」について、川嶋（一九八五）では、以下のように述べられている。

『古事記』にあらわれる神名のうち、「足^上名椎」「手^上名椎」と表記されているものを取りあげて私見を述べる。この神名は宣長以来アシナツチ・テナツチと訓み、「櫛名田比売を撫で愛しみつる」意をこめたものであると一般に解釈されている。しかし、それは必ずしも妥当ではない。訓みの面からいえば、「手^上名椎」のように「手」が語頭に立つ場合には、「手」はテと訓むよりタと読む方がよく、「足」もアシと訓むよりアと読むのがよい。「足^上名椎」・「手^上名椎」はそれぞれアナツチ・タナツチと訓めることになる。神名が農耕神話中に登場することを考えれば、その原義は、アナツチが「畔な土」、タナツチが「田な土」（「な」は連体助詞）と解釈するのがよいと思われる。アクセントの面から見れば、名義抄などの資料で、足・手・畔・田はいずれも平声であり、同じアクセントであるところから、原義は畔・田であったものを、ある時期、足・手

と取り違えられたと推測される。

そして、この川嶋（一九八五）を受けて、瀬間（二〇一五）は、ナ・ツの両方を共に連体助詞であると解釈した上で、

タナ（田ナ）＋つ（連体助詞）＋ち（神格接尾辞）
アナ（畔ナ）＋つ（連体助詞）＋ち（神格接尾辞）

と結論づけられた。

有坂（一九三一・一九三四）に挙げられているように、タ（手）はテ（手）の被覆形である。また、川端（一九七九）では、「名詞の活用」の（C）において、被覆形が、「自立形を形造る、資格的に接尾語であるもの」である《i》を伴う際に、子音（この場合はs）を挿入したものととして、名詞被覆形ア―露出形アシ（足・脚）を挙げられている。そして、拙稿（二〇〇六）において、筆者は、「名詞被覆形＋名詞」・「名詞露出形＋名詞」の複合名詞について調査したところ、上代では、「名詞被覆形＋名詞」の方が「名詞露出形＋名詞」よりも、異なり語数・述べ語数が多いことについて述べた。また、前述の辞書の記述から、連体助詞ナは、名詞の被覆形に付くことが多いこ

とが分かっている。よつて、「足上名椎」・「手上名椎」を、アシナヅチ・テナヅチではなく、アナヅチ・タナヅチと訓むことに、筆者は同意する。

その上で、アナヅチを「ア+連体助詞ナ+連体助詞ツ+チ」、タナヅチを「タ+連体助詞ナ+連体助詞ツ+チ」と解釈した瀬間(二〇一五)説について考える。アとチ、タとチを複合させるに当たり、ア・タ・チが全て一音節であることから、そのまま複合させたアチ・タチでは語構成が分かりにくくなるため、アとチ、タとチの間に連体助詞を挿入させることになったものと考えられる。^①ただ、それならば、出来上がった複合名詞はアナチ・タナチであつたはずである。しかし、実際に存在する例は、連体助詞ナの後更に連体助詞ツを伴つたアナヅチ・タナヅチである。これは、上代において、既にナが連体助詞であるという認識がなくなつてしまつた、つまり、連体助詞ナが形骸化した結果、改めて複合関係を明らかにするため、更に連体助詞ツが挿入されたということであると考えられる。

なお、ア〔足〕とタ〔手〕は対になる語であるため、「足上名椎」「手上名椎」は、足の神・手の神という解釈で良いのではないか、或いは、足の神・手の神という意味に、更に畔の神・田の神という意味もかけられていると考えれば良いのでは

ないかと考える。しかし、ここで連体助詞ナ・連体助詞ツについて考察するには、ア〔足〕・タ〔手〕の意であつてもア〔畦〕・タ〔田〕の意であつても良いので、その点はひとまず置いておき、連体助詞ナの後更に連体助詞ツが伴われていることから、上代において既に連体助詞ナが形骸化しているものと考ええる。

二

本節では、級長戸邊命・級長津彦命について見てみる。

一書曰、伊弉諾尊與^二伊弉冉尊^一、共生^三大八洲國^一。然後、伊弉諾尊曰、我所生之國、唯有^二朝霧^一而、薰滿之哉。乃吹撥之氣、化^二爲神^一。號曰^三級長戸邊命^一。亦曰^三級長津彦命^一。是風神也。
(『日本書紀』神代上)

右の部分において、日本古典文学大系『日本書紀』上の頭注一二・一三では、級長戸邊命に對し、

シは風・息の意。シナは、息長(おきなが)にあたる。戸

はト甲類^ㄱの音。^ㄱと交替しやすい音。辺(べ)はベ甲類^{be}の音。^{be}と交替しやすい音。よってここはシナツメ(息長の女)の意。つまり風の女神。級の字だけでもシナと訓む。

と、級長津彦命に対し、

記に志那都比古とあるので、級長津彦をシナツヒコと訓む。息長ツ彦の意。風の男神。シナトベ(女神)と一対。これが男女一対をなしているにかかわらず、書紀の編者は、「亦」としてシナトベの別称のように扱っている。

と解説している。

つまり、「シナトベ^ㄱシナツメ^ㄱシナ(息長) + 連体助詞ツ + メ(女)」・「シナツヒコ^ㄱシナ(息長) + 連体助詞ツ + ヒコ(彦)」という男女一対の風の女神と男神だということである。この説に対し、筆者は、シナトベ・シナツヒコが男女一対の風の女神と男神だという点、及び、「ト^ㄱツ^ㄱ連体助詞ツ」であるという点に同意する。しかし、ナは、むしろ連体助詞と捉える方がよいのではないかと考える。

その点に関連して、このシナトベ・シナツヒコについて、田中(一九八二)は以下のように述べられている。⁽²⁾

さて、シナトベ命(筆者注・前述の『日本書紀』の「級長戸邊命」・「シナトの風」(祝詞―六月晦大祓)のシナトは、シは風の意・ナは連体格を作る格助詞・トは場所の意とされている。ところが、シナツヒコ命の場合は、ツが格助詞なのでシナは名詞相当であるはずである。これは、もと格助詞であったナが、名詞語尾化してシナとなったものと思われる。このような例は、ミナト(水の門)・ミナウラ(水の占)・ミナソコ(水の底)などのミナ(水の)が、ミナソク(水注く)・ミナギラフ(水霧らふ)のミナ(水)となるといふところにも見られる。

シナタツ・シナテル・シナダユフのシナも、このようにしてできた風の意のシナであろう。

(中略)「級長戸辺命」「級長津彦命」をシナガトベノ命・シナガツヒコノ命と訓ずるのは(兼方本・私記乙本)、ナの音を表わす「長」をナガと誤読したのによるとされている。これは一方で、息長^{オキナガ}や息長鳥などのように息が長く続くという意味の語があったため、「吹き撥フ息」に生りま

せる風神の名についても、息が長く続くという俗解を生じたものと思われる。そして、この俗解はまことにものともらしいものであるので、古くから受け入れられていたのであろう。

つまり、シナツヒコは「シ〔風〕＋連体助詞ナ＋連体助詞ツ＋ヒコ」だということであり、この説に筆者は同意する。なお、連体助詞ナが「名詞語尾化」という説については、今はひとまず保留する。少なくとも、ナが元は連体助詞だという点を、今は重視することにした。

よって、この二説から見て、筆者は、シナトベシナツメは、「シ〔風〕＋連体助詞ナ＋連体助詞ツ＋メ〔女〕」、シナツヒコは「シ〔風〕＋連体助詞ナ＋連体助詞ツ＋ヒコ〔彦〕」だと捉える。すると、前述のアナツチ・タナツチの場合と同様に、連体助詞ナの後更に連体助詞ツが伴われていることから、やはり、連体助詞ナは形骸化しているものと考えられる。

三

第一節・第二節では、「名詞＋連体助詞ナ＋連体助詞ツ＋名

詞」の複合名詞の存在から、連体助詞ナの形骸化について述べた。次に、本節では、「名詞＋連体助詞ナ＋名詞」の複合名詞の、後項の名詞が連濁する例について見ることにする。

まず、「名詞＋連体助詞ナ＋名詞」の複合名詞の後項の名詞が連濁していない例は以下の通りである。これらの例は、現代に至るまで連濁していない。

(1) 後項の名詞が連濁しない「名詞＋連体助詞ナ＋名詞」

ウナカミ〔海上〕

……海の底沖つ深江の海上の〔宇奈可美乃〕子負の原

に……〔万葉集八一三〕

海上瀉〔下総〕〔文明本節用集〕⁽³⁾

タナスエ〔手末〕

手端吉棄物、足端凶棄物〔略〕手端吉棄 此云多那須衛能余之岐羅毗一〔日本書紀〕神代上

手端吉棄 太奈須恵乃与之支良比〔平平平平上上上上〕〔御巫本

『日本書紀私記』

タナソコ〔手底〕

手掌慘亮 手掌慘亮、此云陀那則舉謀耶羅々爾〔日本書紀〕顯

宗即位前

マナカビ〔眼間・目交〕

……いづくより来りしものそまなかひに〔麻奈迦比尔もとなかかりて安眠しなさぬ〕〔萬葉集〕八〇二

マナコ〔眼〕

眼（略）マナコ（平平上）（略）（高山寺本『類聚名義抄』）

法眼（『文明本節用集』）

ミナセヤマ〔水無瀬山〕

水無瀬山〔水無瀬山〕（『文明本節用集』）

ミナソコ〔水底〕

大海の水底深く〔美奈曾己布可久〕思ひつつ裳引き平

しし菅原の里（『萬葉集』四四九二）

ミナト〔港・湊・水門〕

湊風〔美奈刀可是〕寒く吹くらし奈呉の江に妻呼び交

し鶴さはに鳴く（『萬葉集』四〇一八）

湊集（略）禾、美奈止（上上上）（略）（図書寮本『類聚名義抄』）

湊（『文明本節用集』）

次に、「名詞＋連体助詞ナ＋名詞」の複合名詞の後項の名詞が連濁している例は以下の通りである。

（2）後項の名詞が連濁する「名詞＋連体助詞ナ＋名詞」^④

アナズエ〔足末〕

足端〔安那須惠（平平平）〕（御巫本『日本書紀私記』）

スナゴ〔砂子〕

砂（略）川云禾、以佐古（上上上）一云須奈古（平平）（図書寮本『類聚名義抄』）

タナゴコロ〔掌〕

合掌（『文明本節用集』）

マナブタ

臉（略）マナフタ（平平上平）マナコ（略）（高山寺本『類聚名義抄』）

ミナヅキ〔水無月・六月〕

旦月〔或作二皆熱水無月一倭六月異名〕（『文明本節用集』）

カミナビ・カミナビ〔神奈備〕

……神代より言ひ継ぎ来たる神奈備の〔甘奈備乃〕三

諸の山は……（『萬葉集』三三二七）

かむなつしくれもいまたふらなくにかねてうつろふか

みなひのもり

かみなひの（平平平上平）伏見宮家本

(平平平平〇) 毘沙門堂本古今集註

(〇〇上平〇) 古今訓点抄

(〇〇〇上〇) 堯惠本古今集聞書

『古今和歌集』 巻第五 秋歌下 二五三

カミナヅキ〔神無月〕

Caminazuqi. カミナヅキ (神無月) 詩歌語。jiguachi.

(十月) 十月。〔日葡辞書〕

(2) の例は、全て、「名詞+連体助詞ナ+名詞」の複合名詞の後項の名詞が連濁したものである。連濁とは、前項と後項が複合しているということを明らかにするものである。一方で、「名詞+連体助詞ナ+名詞」の複合名詞における連体助詞ナ役割は、連体修飾であり、つまり、前項の名詞と後項の名詞を複合させることである。連体助詞ナにより、前項の名詞と後項の名詞が複合していることは明らかであるはずである。ところが、既に明らかであるはずであるにもかかわらず、連濁によって、更に、前項の名詞と後項の名詞が複合しているということを明らかにしているということになる。

この連濁は、ナが鼻音であることが影響した可能性もある。しかし、後項の名詞が連濁しない(1)の「名詞+連体助詞ナ

+名詞」の複合名詞の例も存在することから、鼻音の影響よりも、ナが連体助詞であるという認識がなくなってしまうために、更に後項の名詞が連濁したのではないかと考えられる。

(2) の例から、それぞれの複合語において、上代の連濁した例を初めとし、中古・中世・近世と、時代が下ると共に、少しずつゆつくりと、連体助詞ナは形骸化して行ったものと考えられる。

一方、「名詞+連体助詞ナ+名詞」の複合名詞の後項の名詞が、連濁しない例と連濁する例の両方が存在するものがある。

(3) 後項の名詞が連濁しない場合と連濁する場合の両形がある「名詞+連体助詞ナ+名詞」

ウナハラ〔海原〕

今替はる新防人が船出する海原の上に(宇奈波良乃宇倍尔) 波な咲きそね〔萬葉集〕四三三五

ウナバラ〔海原〕

ウナハラ 倉海 (文明本節用集)

カミナキ〔巫〕

(略) 巫 (略) カミナキ (平平平平) (略) カムナキ (高山寺本『類聚名義抄』)

カンナギ〔巫〕

Camagui. カンナギ (巫) 神 (Camis) に仕える人。

〔『日葡辞書』〕

マナシリ〔毗・皆〕

皆毗 (略) マナシリ (平平上〇) (高山寺本『類聚名義抄』)

マナジリ〔毗・皆〕

明眸美人義也 (『文明本節用集』)

ミナギハ〔水際〕

舟競ふ堀江の川の水際に (美奈伎波尔) 来居つつ鳴くは

都鳥かも (『萬葉集』四四六二)

ミナギワ〔水際〕

MINAGIWA. ミナギハ・水際 (midz no kiwa) n. Water's edge. (『和英語林集成』初版)

また、(1) に挙げたタナスエ〔手末〕(『日本書紀』神代上)の例「手端」は、「足端」と対になっているので、「足端」はアナスエと訓むものと見られる。その一方で、時代が下ると、(2) に挙げたアナズエ〔足末〕(御巫本『日本書紀私記』)のように連濁する例がある。つまり、アナスエ・アナズエ〔足末〕は、(3) の例と捉えてよいと考えられる⁷⁾。

アナスエ・アナズエ〔足末〕を含めて、「名詞+連体助詞ナ+名詞」の複合名詞の後項の名詞が、連濁しない例が上代・中古にあり、時代が下って、中世・近世になってから連濁する例が出現している。(3) の例からは、この間に、連体助詞ナが形骸化したということが分かる。

四

以上のように、本論文は、連体助詞ナを含む複合名詞のうち、二つの形式を検討することにより、連体助詞ナが形骸化して行く状況について述べた。

第一節・第二節では、連体助詞ナの後に、更に連体助詞ツを伴う、「名詞+連体助詞ナ+連体助詞ツ+名詞」の複合名詞の存在から、連体助詞ナが上代から形骸化していることが分かった。アナツチ・タナツチもシナトベ・シナツヒコも固有名詞の例である。固有名詞は普通名詞以上に語構成が分かりにくくなる傾向があるため、上代において既に連体助詞ナが形骸化していたものと考えられる。

なお、第三節で述べたように、『日本書紀』の同じ箇所において、タナスエと訓む「手端」の例と、アナスエと訓むものと

見られる「足端」の例とが対になっていることから考えても、「足^上名椎」・「手^上名椎」は、アシナツチ・テナツチではなく、アナツチ・タナツチと訓むべきであると考えられる。そして、アナスエ・タナスエが足と手とが対になっていることから考えても、アナツチ・タナツチは、どちらかと言えば足の神・手の神という解釈で良いのではないかと考える。

そして、第三節では、(2)の「名詞+連体助詞ナ+名詞」の複合名詞の後項の名詞が連濁している例、及び、(3)の「名詞+連体助詞ナ+名詞」の複合名詞の後項の名詞が、連濁しない例と連濁する例の両方が存在するものから、上代の連濁した例を初めとし、中古・中世・近世と、時代が下ると共に、それぞれの複合名詞によって、少しずつゆつくりと、連体助詞ナが形骸化して行ったということが分かった。これらは普通名詞の例である。

つまり、普通名詞に比べて語構成における分析意識が残りにくい傾向のある固有名詞においては、上代において既に連体助詞ナは形骸化しており、連体助詞ナの後に、更に連体助詞ツを伴うことで、連体助詞ツが連体修飾の役割を担うことにより、前項の名詞と後項の名詞を複合するという関係を明らかにさせていたものと考えられる。

一方、普通名詞は語構成における分析意識が比較的残りやすいが、それも時代が下ると個別的に分析意識が失われることがあり、上代から時代が下ると共に、それぞれの複合名詞によって、少しずつゆつくりと、連体助詞ナが形骸化して行った。よって、連体助詞ナに下接する後項の名詞を連濁させることにより、前項の名詞と後項の名詞を複合するという関係を明らかにさせるということが、時代が下ると共に、少しずつ行われて行ったものと考えられる。ナの形骸化とは、連体の意味を持つという意識が失われることであるが、ナを含む語構成における分析意識が失われることでもあると言える。

【使用文献】

秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 資料篇』校倉書房
秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 索引篇』校倉書房
上野和昭編『御巫本日本書紀私記 声点付和訓索引』(アケセント資料索引 一二)

『文明本節用集 研究並びに索引』(勉誠社)

『邦訳日葡辞書』(岩波書店)

『日本書紀』(日本古典文学大系 岩波書店)

『神宮古典精影印叢刊』2 古事記 日本書紀(下) (八木書店)

『萬葉集』(新編日本古典文学全集 小学館)

『宮内庁書陵部蔵 図書寮本類聚名義抄 本文編』(勉誠社)

『宮内庁書陵部蔵 図書寮本類聚名義抄 索引編』(勉誠社)

『和名類聚抄』(天理善本叢書 八木書店)

『ヘボン著 和英語林集成 初版・再版・三版対照総索引』

(港の人)

『時代別国語大辞典上代編』(三省堂)

『岩波古語辞典 補訂版』(岩波書店)

『日本国語大辞典 第二版』(小学館)

【参考文献】

有坂 秀世 (一九三二) 「国語にあらはれる一種の母音交替

について」(『国語音韻史の研究 増

補新版』一九五七 三省堂)

(一九三四) 「母音交替の法則について」(同)

川嶋 秀之 (一九八五) 「古事記神名の原義私見——足上名

椎・手上名椎の場合——」(『国語

学』一四二集)

川端 善明 (一九七九) 『活用の研究 II』(大修館書店)

瀬間 正之 (二〇一五) 『記紀の表記と文字表現』(おうふ

う)

田中 久美 (一九八二) 「枕詞「しなたつ・しなてる・しな

だゆふ」について」(『叙説』第六

号)

蜂矢 真弓 (二〇〇六) 「名詞被覆形・露出形の型の通時的

相違」(『国語語彙史の研究』二十

五)

(二〇一一) 「連体助詞を伴う名詞被覆形による

複合名詞の変化」(『国語語彙史の研

究』三十)

注

(1) 拙稿(二〇一一) 参照。

(2) 本論文では、「名詞+連体助詞ナ+連体助詞ツ+名詞」の複合名詞の

例について見ているため、「ミ+ナ+動詞」・「シ+ナ+動詞」につい

ては取り挙げない。

(3) へ) 内は小字であることを示す。以下、同様。

(4) カムナガラのカラについては、『時代別国語大辞典上代編』の「から

(助)」の項に、「語源的には名詞であるし、(略) 形式名詞であるか助

詞であるかの境界は曖昧であるが、助詞としての把握も可能である。」

とあることから、カムナガラのカラは助詞であり、カムナガラは複合

名詞ではない可能性があるため、(2) には取り挙げない。

- カムナガラ
立山に降り置ける雪の常夏に消すて渡るは神ながらとそ（可無奈我
良等會）（万葉集四〇〇四）
- （5）参考までに、『文明本節用集』には、カミナシヅキ（神無月）とある。
神無月（倭国十月異名或作陽月）十月諸神皆集出雲大社一故
云「一」也出雲云「神有月」也
- （6）『日葡辞書』は『邦訳日葡辞書』による。以下、同様。
なお「タナスエ（手末）」は、「（1）」に挙げたように御巫本『日本書紀
私記』でもタナスエのままである。